

令和3年度
第54回 大分県公立学校教頭会研究大会
中津大会

研究録54

令和3年8月10日



大分県公立学校教頭会

第54回 中津大会「研究録54」の発刊に寄せて

大分県公立学校教頭会

会 長 泊 陽 子

新型コロナウイルス感染拡大防止対策の徹底が求められる中、本年度から小中学校における新学習指導要領が全面実施となりました。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の徹底、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けたカリキュラムマネジメントの推進が求められています。また、このような中、大分県教育委員会は令和3年度重点方針として、体力向上やいじめ・不登校対策といった教育課題への組織的取組を進め、教育水準の向上を図るとともに、教員の長時間勤務を改善し、子どもと向き合う時間を確保するため、専門スタッフ・外部人材の活用やICTの活用などによる業務改善を図るなど学校における働き方改革の推進を掲げています。私たち、副校長・教頭は、子どもの力と意欲の向上に向けた組織的な取組を推進するために、校長がリーダーシップを発揮できるよう学校組織を活性化し、教職員の人材育成に努めていかなければなりません。

大分県公立学校教頭会は、本県教育の発展に寄与することを期し、半世紀にわたる歴史の中で、政策提言能力を備えた職能研修団体として歩んでまいりました。大分県の重要課題である「学校マネジメントの深化」「授業改善の徹底」「体力向上の推進・健康課題への対応」「いじめ・不登校対策等の推進」等、多様な課題と向き合い、課題解決の方途を実践してまいりました。

第54回大分県公立学校教頭会研究大会中津大会は、＜自立・協働・創造＞をキーワードとする第12期全国統一研究主題「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」の2年次として、5課題10分科会において各2本の提言をもとに学習を深めることができました。「提言していただいた先生のおかげで、勤務校の地域や規模が違って、コロナ禍の中で地域人材の活用をどのように行うか、学年や学校間の交流をどうするか、最初から無理だと諦めるのではなく、条件や方法の工夫の仕方を学べたことがよかった。」「9年間を見通した教育活動の重要性を強く感じた。」等の声から、会員の皆様に学校組織の活性化と児童生徒の「生き抜く力」の育成に繋げるための活力を生み出すことができたのではないかと思います。また、全体会での記念講演では、ご自身の経験を取り上げながら出会いと繋がり大切さを話していただき、改めて教職員としての職責について示唆をいただきました。

コロナ禍のため誌上開催となりましたが、この研究大会を基盤として、継続性・協働性・関与性のある確かな実践をまとめ、ここに研究録を発刊できますことを大変嬉しく思います。

最後になりましたが、本研究大会を開催するにあたり、細部にわたって準備され、真心のこもった運営を行っていただいた中津市教頭会の皆様に心よりお礼申し上げます。

また、公務ご多用の中ご指導ご助言ご後援を賜りました、大分県小学校長会、大分県中学校長会の皆様ならびに関係諸機関・諸団体の皆様より多大なご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。「研究録54」発刊のご挨拶といたします。

目 次

1	研究主題と日程	1
2	第54回大分県公立学校教頭会研究大会中津大会 分科会各担当一覧	2
3	記念講演 「百の花を咲かす！」 ～我が郷土の歴史人、綺羅星の如し～ 中津市生涯学習大学講師 安 部 恭 一 氏	4
4	記念講演の感想	8
5	提 言	

■■■ 教育課程に関する課題 ■■■

第1 A分科会			
コロナ禍でのカリキュラムマネジメントにおける教頭の役割			
大分市立坂ノ市小学校	久々宮 浩 之	10	
第1 A分科会			
小中9年間を見通した教育課程の編成			
ー原川中学校区小中一貫教育における教育課程の編成ー			
大分市立原川中学校	糸 永 秀 章	11	
第1 B分科会			
「主体的な自己実現」を図る教育課程の実現をめざして			
ーキャリア教育と郷土学を中心としたカリキュラム・マネジメントー			
豊後大野市立新田小学校	羽田野 康 治	12	
第1 B分科会			
教職員・生徒・家庭・地域、全体で取り組む学校づくり			
ー学校教育目標が具現化された教育活動のための教頭としての役割ー			
竹田市立竹田南部中学校	渡 邊 幸 美	13	

■■■ 子供の発達に関する課題 ■■■

第2 A分科会			
支援を要する児童への組織的な対応と教頭の役割について			
ー校内の体制づくりと保護者・関係機関との連携ー			
宇佐市立封戸小学校	穴 瀬 直 子	14	
第2 A分科会			
特別な支援を要する生徒への組織的・協働的なかわりについて			
ー分析ソフトの利用と関係機関との教頭のかかわりについて			
中津市立緑ヶ丘中学校	小 倉 英 志	15	

第2B分科会

特別支援教育をもとにした小・中の連携をどう進めるか

ー由布市の「心の教育」の推進と教頭の役割ー

由布市立石城小学校 竹 中 靖 典 16

第2B分科会

不登校生の学習支援の在り方

ー鶴中版アウトリーチの取組を通してー

別府市立青山中学校 大 塚 史 朗 17

■■■ 教育環境整備に関する課題 ■■■

第3A分科会

児童生徒と向き合う時間確保のための働き方改革と教頭の役割

ーコロナ禍における学校業務システム構築と学校・家庭・地域の協力体制の充実を考えるー

大分市立小中一貫教育校 賀来小中学校 廣 田 秀 俊 18

第3A分科会

生徒の登下校時の安全を守る方策をどのように行うか

ー自転車通学生への取組を通してー

大分市立大東中学校 内 藤 俊 章 19

第3B分科会

学校教育目標を具現化する組織的な取組における教頭の役割

ー学校及び児童が抱える問題を改善・解決する主体的な専門部活動の活性化をめざしてー

日田市立咸宜小学校 加 藤 慶 一 20

第3B分科会

「働き方改革」実現に寄与する教育環境整備にむけた教頭の役割

ーICT機器等の整備及び活用と時間確保にむけた取組ー

玖珠町立塚脇小学校 穴 井 有 司 21

■■■ 組織・運営に関する課題 ■■■

第4A分科会

”チーム高小”で課題解決を図るための教頭としての役割

ーミドル・アップダウン・マネジメントの実働をめざしてー

豊後高田市立高田小学校 近 藤 哲 司 22

第4A分科会

ミドル・アップダウン・マネジメントが機能する組織の在り方について

宇佐市立西部中学校 長 尾 大 介 23

第4B分科会

組織的な課題解決のあり方と家庭・地域との連携に係る教頭の役割を考える

ー子供たちが生き生きと生活する学校をめざしてー

大分市立舞鶴小学校 上 野 淳 24

第4B分科会

育成指標に基づいた計画的・組織的な若手教職員の人材育成

白杵市立西中学校 戸 高 浩 二 25

■■■ 教職員の専門性に関する課題 ■■■

第5A分科会

「ベクトルをそろえる 強みを生かす 高め合う」をキーワードにした教職員の意識改革

佐伯市立上野小学校 清 水 昌 和 26

第5A分科会

教職員が自らのキャリアを意識し、それぞれの立場で専門性の向上を図る教頭の役割

佐伯市立直川中学校 冨 高 長 寛 27

第5B分科会

学校内外の人的資源を活用しながら「学校教育目標の実現」と

「働き方改革」を進める教頭の役割

日出町立豊岡小学校 河 村 雅 文 28

第5B分科会

「働き方改革」推進と教職員の資質向上を図るための教頭の役割

－教職員の専門性を活かした協働体制の構築と校内衛生委員会の連携を通して－

国東市立安岐小学校 徳 丸 将 29

研究主題

「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」

キーワード 〈自立・協働・創造〉

趣 旨 全国及び九州地区公立学校教頭会共通の第12期研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」キーワード〈自立・協働・創造〉を受け、本県における教育課題とのかかわりの中で、変革期の教育のあり方やそれを創造する教頭のあり方を究明し、教育課題解決への最善の方途を探究する。

コロナ禍の中、中津大会の持ち方を次のように変更して行いました。

(1) 分科会提言は「誌上発表」とします。

① 6月29日(火)の「提言者・運営委員・研究部打合せ会」で提言原稿を仕上げます。

② 提言原稿をまとめて大会要項を作成します。

③ 大会要項は7月下旬に郡市研究部長へ郵送します。

(2) 「開会式」「記念講演」は7月16日(金)に実施します。

記念講演等はDVDにして全会員に配付します。

(3) 「研究録54」を作成して、10月に郡市研究部長へ郵送します。

研究録54の内容は「参加した分科会提言の感想」及び「記念講演DVDを視聴した感想」を掲載します。

大分県公立学校教頭会会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

第54回大分県公立学校教頭会研究大会中津大会 分科会担当一覧

課題	分科会	研究主題	種別	提 言 者		
				郡 市	学 校	氏 名
1	A	教育課程に関する課題	小	大 分 市	坂 ノ 市 小	久々宮 浩 之
			中	大 分 市	原 川 中	糸 永 秀 章
	B		小	豊後大野市	新 田 小	羽田野 康 治
			中	竹 田 市	竹田南部中	渡 邊 幸 美
2	A	子供の発達に関する課題	小	宇 佐 市	封 戸 小	穴 瀬 直 子
			中	中 津 市	緑 ヶ 丘 中	小 倉 英 志
	B		小	由 布 市	石 城 小	竹 中 靖 典
			中	別 府 市	青 山 中	大 塚 史 朗
3	A	教育環境整備に関する課題	小	大 分 市	賀来小（中）	廣 田 秀 俊
			中	大 分 市	大 東 中	内 藤 俊 章
	B		小	日 田 市	咸 宜 小	加 藤 慶 一
			小	玖 珠 郡	塚 脇 小	穴 井 有 司
4	A	組織・運営に関する課題	小	豊後高田市	高 田 小	近 藤 哲 司
			中	宇 佐 市	西 部 中	長 尾 大 介
	B		小	大 分 市	舞 鶴 小	上 野 淳
			中	臼 杵 市	西 中	戸 高 浩 二
5	A	教職員の専門性に関する課題	小	佐 伯 市	上 野 小	清 水 昌 和
			中	佐 伯 市	直 川 中	富 高 長 寛
	B		小	速 見 郡	豊 岡 小	河 村 雅 文
			小	くにさき地区	安 岐 小	徳 丸 将

研究主題「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」
キーワード〈 自立・協働・創造 〉

中津市実行委員会		研究部・事務局員		運 営 委 員		記 録
学 校	氏 名	学 校	氏 名	学 校	氏 名	
南 部 小	賀 未 紀 子	三重第一小	衛 藤 浩	如 水 小	末 廣 文 俊	県研究部・ 郡市研究部長
東中津中	末 永 郁	大 在 中	後 藤 秀 成			
		上堅田小	小手川 真 一	上 津 小	財 前 由紀子	
		菅 尾 小	伊 藤 陽 一			
和 田 小	花 崎 淳	香々地中	北 迫 美 和			
三 保 小	森 岡 正 信	菅 生 小	熊 谷 文 江	耶馬溪中	相 良 友 一	
		春日町小	高 田 昌 弘			
		東 陽 中	植 木 弘 晃			
秣 小	宮 瀬 和 廣	春木川小	宮 本 高 生	山 国 中	吉 松 重 成	
		日 出 中	木 田 尚 武			
柳ヶ浦小	正 尾 和 幸	塚 原 小	長谷川 祐 一	北 部 小	奥 村 美智代	
豊 陽 中	高 橋 雅 浩					
		別 保 小	徳 本 修 二	小 楠 小	高 山 ゆかり	
		若 宮 小	江 藤 浩 哲			
		北山田小	岩 木 哲 郎			
		下 郡 小	藤 田 光 茂			
		大 道 小	後 藤 真 理	鶴 居 小	市 川 洋 志	
		杵 築 中	相 部 俊 郎			
		城 東 中	相 河 野 剛			
大 幡 小	山 中 三 雄	南立石小	山 崎 靖 彦	三 光 中	是 木 秀 伸	
		野 津 小	板 井 達 彦			
		碩田学園	田 島 勉			
		西の台小	廣 田 貞 治	今 津 中	加 来 洋一郎	
		大 在 小	泊 陽 子			
城 北 中	安 部 友 善	庄 内 中	廣 田 裕 治			
		旭 日 小	石 田 吉 幸	深 水 小	森 園 敬 一	
		明 治 小	馬 場 淳 子			
		堅 徳 小	水 島 陽 子			
		日 岡 小	児 島 誠一郎			

「百の花を咲かす！」 ～我が郷土の歴史人、綺羅星の如し～

中津市生涯学習大学講師 安部 恭一 氏

I. はじめに

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介をいただきました中津市生涯学習大学講師の安部恭一と申します。どうぞ、よろしくお願いします。本日は、第54回大分県公立学校教頭会研究大会「中津大会」のご開催、誠にありがとうございます。

「小人（しょうじん）は縁に出会って、縁に気づかず。中人（ちゅうじん）は縁に気づいて、縁を活かさず。大人（たいじん）は、袖振り合うた縁をも活かす。」という言葉があります。どうか、今日も1つの縁であります。この縁が活かせるようにして頂ければ、有り難いと思います。それでは、よろしくお願いします。

II. ふるさと（古の人の受け継ぐ山間）

私の故郷は宇佐市院内町で、昭和48年からこの中津市に住んでいます。実家は山間部の田舎の方で、かつての宇佐郡院内町の余（あまり）です。高校は家から25キロ離れている宇佐高校、がたがた道を往復50キロ、私は自転車で通いました。朝、家を自転車で出て、家の横の道を一直線に下って横に曲がったら、我が家が見えなくなるんです。そこでぼっと振り返って家の方を見ると、家の勝手口の裸電球に黒いシルエットが見えました。そのシルエットを見て、安心感というか落ち着く気持ちで学校に通っていました。帰るときも、家の方を見ると、裸電球の下で黒いシルエットが行ったり来たりしているのが見えましたね。今、考えてみると、そこには、母親の姿がいつもありました。「この子は片道25キロも道を怪我もせずに高校まで行けるじゃろうか、今日も無事に帰って来るじゃろうか」という、母親がいました。木の上に立って見る如く、我が子を心配しながら見ていた母がいたかと、今になったら気づきます。

III. 真実を求め、真実に生きん（建学の精神）

先ほど紹介して頂きましたが、私は昭和48年から中津市の東九州龍谷高等学校で、教諭、教頭、校長と教師生活46年を勤めさせて頂きました。当時は、扇城（せんじょう）高校と言いまして、1899年に大分県下で最初にできた私立の女学校です。創立者の梅高秀山（うめたか しゅうざん）は、男性しか教育を受けてなかった時代に、教育は男女関係なくこれからは必要な時代が来ると、女子校をつくろうと決意しました。ちょうど、中津城（別名は扇城）の中に土地を持っており、そこに扇城女学校を開いたのが最初でした。仏教の中でも親鸞聖人の精神を教育の基本理念として、人間だけでなく全ての生き物、動物も、植物も幸せな世の中にならなくてはならない。また、幸せな人だけでなく、悲しむ人、苦しむ人にこそ、教育は必要であるというものです。

IV. 技術を学ぶのではなく風格を学べ（卓球）

私が教員として勤め始めた時、卓球部の顧問をしていまして、卓球界では鬼の監督として知れ渡っており、高校は全国大会の常連校でした。そうした時、卓球で松崎キミ代という選手に出会いました。松崎キミ代は、当時の卓球世界チャンピオンです。松崎さんから私は声をかけてもらい、松崎の風格とは何かを学ばせて頂きました。それは、単に勝つことにこだわるのではなく、一人ひとりに思いやりや感謝の気持ち、そして優しさが全てににじみ出るような一人の立派な人物でないとならないんだなと思いました。準決勝で、前回チャンピオンは負けたけども、一つも悔しがらずに勝った勝者にお礼を述べに行った松崎選手の姿を、当時の中国の最高指導者、周恩来は見ていたんですね。

V. 不自由であるが不幸ではない（手話）

そしてまもなく、私は卓球を引退し、自由に過ごせる時間ができました。家の隣に耳の不自由な一人の青年が住んでいました。それが私と聾者との出会いで、私も手話が少しできたらいいなと思いました。ある時、聾者の新婚さん夫婦が妊娠しました。私も手話の勉強をして幾分手話もできるようになっていましたので、病院の手話の通訳にと依頼されました。赤ちゃんが無事に生まれると、旦那さんが私に「医者にも私の子どもは耳が聞こえるか、聞いて下さい」と頼むのです。しばらくして、検査が行われ医者が私に言い渡しました。私は、「あなたの息子さんは耳が聞こえません。仕方ないです。病気です」と旦那さんに手話をするのはとても辛かったです。すると旦那さんは「分かった。良かった。うれしい。」と言うんです。なぜかと聞くと、「私たち夫婦は耳が聞こえない。子どもが耳が聞こえたら、私たちはどのようにして、子どもを育てればよいか分かりません。子どもが私たち二人の世界と一緒に世界なので、二人と一緒に育てることができます。だから、幸せです。」と言うんです。私たちは、耳が聞こえないので不幸だろうと考えますが、耳が聞こえないという少し不自由さがあるけれども、不幸ではない、幸せ度はあるというのです。考えてみると、たまたま、耳が聞こえる私たちの方が数が多いので、それが普通状態で、耳が聞こえない人は数が少ないから不自由な状態にあるんだなと勝手に思い込んでいたということが分かりました。

VI. 福澤諭吉の原風景（虱取りの石）

福澤諭吉のお母さんはお順（じゅん）さんと言います。お順さんは、旦那さんをなくしてから、大阪から5人の子どもを連れて中津に帰ってきました。諭吉は5人兄弟の一番末っ子で、1歳半の時でした。その諭吉は母親に感化されます。家の近所に、チエちゃんという、みすばらしい着物を着て、食べるものも食べられない、幼い女の子がいました。当時の人達は、家なき子のチエを粗末に扱っていたのに、お母さんは、「チエちゃん、おいで。」と家の中に呼び寄せていました。「チエちゃん、お座り。」と言って横に座らせる。「諭吉」と呼ぶ。裏で遊んでいる諭吉が飛んでくる。「なに、お母さん」と言ったら、「そこに座りなさい」と言って、諭吉をチエの横に座らせる。諭吉はチエの体臭が横にいただけで臭くてたまらない。お母さんはチエの頭についている虱（しらみ）をとってやる。大きな石の上に虱を置き、「諭吉、つぶしなさい。」と言う。諭吉は福翁自伝の中に書いております。虱の数は10や、20じゃない、100を超える虱をとっては、ブチュ・

ブチュと親指でつぶす。虱からは血がにじみ出る。諭吉は嫌で嫌でたまらなかった。お母さんは、嫌で嫌でたまらなかった諭吉に毎日同じ事を繰り返してやらせているんです。お母さんはチエの虱をとった後は、手をぬかで洗って、おにぎりを作りチエに食べさせる。チエは、おにぎりをむさぼり食うように食べて、すつと帰って行くんです。その姿を見てお母さんは、「チエちゃん、虱をとらせてもろうて、ありがとう。」「チエちゃん、おにぎりを食べてもろうて、ありがとう。」「チエちゃん、また来てね」と言うんです。お母さんは、してあげるではなく、させてもらったという世界でした。諭吉には知らず知らずと、母親のその教えが効いてきて、母の愛というものは、すごいなと気づかされていくんです。ある時、諭吉は母に聞きました。「何で、チエちゃんを呼び寄せるの」「何で、虱をとってやるの」「何で、おにぎりを食べさせるの」「何で、また来てねと言うの」と。お母さんは言いました。「できる子に声をかけるんじゃないんよ。できない子には声をかけてやらんといけんのんよ」「そして、できない子に声をかけてやって、してやったじゃなくて、させてもろうたと思うと、自分が変わってくるんよ」とお母さんは諭吉に言うんです。諭吉には幼い時の母との思い出が、大人になって花開いてくるんです。

諭吉は海臨丸に乗ってアメリカに行くんですが、日本の要人達は、アメリカの制度や機械や建物を見て回る中、諭吉はアメリカの目の見えない人・耳の聞こえない人・体の不自由な人が自立できる、夫婦生活できるアメリカの姿を見ていました。諸外国にまた行く。『西洋事情』、『文明論之概略』の中に、諭吉は、もしお母さんの教育がなかったら、自分は変わってなかったとメモっている所があるんです。「乳飲み子は肌を離すな。幼児は手を離すな。少年は目を離すな。青年は心を離すな。」私たちは、今から少年や青年を育てるのに、しっかり愛情を持って子を見ていきましょうということなんです。心に寄り添う教育をいていくことが大切なのかもしれません。

VII. 我が郷土の歴史人（綺羅星の如し）

我が郷土の歴史人をいろいろ探っていくと、そこには、中津の風土があるんです。子ども達、若者達に勉強をさせるという中津の土壌があるんです。中津の奥平藩そのものが蘭学を奨励しており、藩校の進脩館（しんしゅうかん）で若者達にしっかり勉強させる。また、浄土真宗本願寺関係のお寺には、真宗学寮があり人間的な生き方を教えており、多く若い僧侶が学ぶ場所がありました。中津は大いに学ぶにふさわしい場所でありました。だからこそ、多くの歴史人がでてきているんです。

進脩館を創った最初の教授には、倉成龍渚（くらなり りゅうしょ）という人がいます。倉成龍渚は、中津で若者に勉強を教えながら、「自分ももっと勉強したい」「素晴らしい指導者から学びたい」と江戸に出て行くんです。そんな時に出会ったのがあの上杉鷹山（うえすぎ ようざん）です。上杉鷹山は、潔白な人であって、財政を立て直すため財政改革をした人です。今にも消えそうな小さな火もフーフーと吹けば大きな火になる、そうなれば藩の皆も燃えて動き出すと、人間の心に火をともした人です。これを「なせば成る、なさねば成らぬ、何事も、成らぬは人の、なさぬなりけり」と言った人が上杉鷹山ですね。その人に山形の米沢藩まで行って論語を教え、すごい人がいると世間に紹介し広めたのが、中津の倉成龍渚でした。倉成龍渚は上杉鷹山がそんなに立派になるには、絶対に上杉鷹山を指導した人があるはずだと調べたら、細井平洲（ほそい へいしゅう）でした。細井平洲の教えが、上杉鷹山に、そして上杉鷹山は細井平洲の教えを守って、しかと生き

て行く、そして、その自分の心を藩の人々に伝えていくんであります。

また、中津には福澤諭吉と又従兄弟になる増田宋太郎がいます。増田は西南の役で西郷隆盛の隊に追隨して、熊本の田原坂に行って鹿児島城山で露となって消えた人です。「私は、西郷先生に1日会えば1日分の愛を感じ、3日会えば3日分の愛を感じる。ゆえに、死生をともにせんのみ。」と最後まで西郷隆盛に追隨して行きました。「若者は中津に帰れ。君たちは中津のためにすることがいっぱいあるから」と、みんなを追い返した。

1988年に、私はアメリカのテキサス州のオースチン大学に行く機会があり行きました。その時に、アメリカにはゴールデンルールがあるんだと聞きました。わずか4つだけでも、アメリカでは親が子どもを育てる時には必ず必要だと言うのです。「Please」・「Thank you」・「Excuse me」・「Yes sir」。どんな時でも何かあれば、この4つの言葉が答えられるように、そして、その信念で生き抜く人でありなさいと、子どもを育てると聞かされました。自由の国、アメリカでも、しっかりした土台がありその上に自由があるんだなと感じました。

(手話で、次の歌をみんなで音楽に合わせ歌う)

『もしも1つだけ、夢が叶うとしたら。君はいつたい、どんな夢を願うだろう。道端に咲く花が揺れてる。幸せな明日へ、僕たちは行くのさ。ああ、幸せな未来へ、笑って行くのさ。夢を探しながら。』

VIII. 百の花を咲かす(百花斉放)

4月になると咲く花があります。スマイレやタンポポやシャクヤクやボタン。それぞれの花に良さがありますね。また、5月になって咲く花、夏の暑い時期に咲く花、秋になったら咲く花もあります。大きい花、小さい花、白い花、赤い花、青い花、いろいろあります。咲く花の時期、咲く花の大きさ、咲く花の色によって、花の値打ちは変わりません。子ども達も、一人一人みんながそれぞれの花を咲かしたらよいのです。私たちは、みんな同じ花を咲かせようと教育しがちであります。一人一人が咲かせる、精一杯の花を私たちは咲かせるようにしていかなければなりません。それぞれが持つ潜在的な能力をどのように花開かせるかが大切だと思います。

プラス思考とマイナス思考があります。ポジティブ思考でいけば、外には「喜び、やる気、意欲」で活動的になります。また、外に発散しない子どももポジティブ思考で、内に「感謝、謙虚、謙遜」の心を持つ子どもになります。しかし、マイナス思考が積み重なると、表向きに「怒り、悲しみ」を表す子どもになり、内向的には「憤り、悔しさ」を持つ子どもになるかもしれません。口(くちへん)にプラス(十)で、叶えるという字になります。口でプラス思考の言葉を出し続けていけば、夢が叶っていくんですね。

IX. おわりに

私のお話もう終わりになりました。中津には歴史を動かした人が綺羅星の如くいたことはご理解できたと思います。そこには、歴史人を輝かせる土壌があった。私たちは教育者として、土壌造りに励んで、新しい子ども達を綺羅星の如く育てていく研究大会であればいいなと思いました。以上で終わります。ご静聴、ありがとうございました。

第54回大分県公立学校教頭会研究大会中津大会

記念講演の感想集

記念講演「百の花を咲かす！～我が郷土の歴史人、綺羅星の如し～」

講 師 中津市生涯学習大学講師 安 部 恭 一 氏

- 夢、希望、未来を語る姿に、自分自身、今の目先の課題ばかりにとらわれていることに気づかされた。大きなビジョンを持って日々の教育に挑むことなくして夢を語れる子どもたちを育てることはできないと感じた。夢を語る教頭でありたいと思う。コロナ禍の中で制限されることが多くあるが、諦めず、可能性を探っていくことの大事さを感じた。
- 初めからエネルギー全開で、話を聞いているだけで、元気が出てくるようだった。そして、「高校」についてのお話で「3R」「5S」など、明確な「信条」「指針」はとても参考になった。具体的な「生徒の悩み」を元に、先生の取組を話していただき、先生の「優しさ」「生徒のために」という思いがとても伝わった。「乳児は肌を離すな、幼児は手を離すな、少年は目を離すな、青年は心を離すな」と例として、教育の根本を話して下さり、とても参考になった。
- 私たちは、その時代の流れにつれ乗ってしまい、子どもを画一的に教育しているところがある。これは、その流れの中にとまらなくなり、子どもが呼ばれなくなった感じがした。その子、その子の可能性を最大限に伸ばし支援をすること。この当たり前のことを忘れてはいけないと強く思った講演であり、自分にとって有意義な時間となった。
- 教育の根本について改めて考えさせられた。最近では、「教える」「育てる」のバランスが崩れ、「教える」ことに重きが置かれすぎているように思う。「人生を拓く」ためには、「育てる」ことにもっと意識を向けることが必要だと思う。今一度、自分の教育に携わる立場を見つめ直してみたい。
- 教師としての先生の姿を通して、どう子供と接するか、どう子供に伝えていくかを教えられた。対話ではなく並話という部分では自分の話を対話し、相手が話しにくい雰囲気を作っていたのではとも思った。また、教師が生徒に自分の行動を通して学びを進めることで、それがつながりとなり、次の世代に伝わっていくことがまさに教育の原点であるとも感じた。教師として、その働く姿を通して、先生方に伝えられる部分もあることから働き方改革も自分たちの姿を若い先生方に見せることで変わる部分もあるのではと思った。
- 安部先生の軽妙なリズムの話しぶりと絶妙な語呂合わせで、時間が経つのを忘れてしまうほどだった。話の中にちりばめられた様々なキーワードを生かし、今後のlifeを考えていきたい。
- 生徒への提唱「あいうえお運動」や「5S方針」等々、生徒や教職員の意欲や意識を高めるのに大変参考になった。結果だけでなく、その過程や心情を育てることを大切にしてきたということにとっても共感することができた。

- バイタリティ溢れるお話の中に高校時代の実践を通して、教育に対する「熱い」思いを感じることができた。中津出身の偉人のコアな話に散りばめられた教育論は今後の自分の糧になりそうだ。
- 学びを育む中津の土壌、幼い頃の教えの大切さ、自分の立ち位置や人との向かい合い方を問いつける話だった。チャレンジしていく姿勢と生活の中での気付きから実践していく気概が素晴らしいと感じた。常に出会いを大切にしながら人から学ぶ姿勢が素晴らしかった。本日学んだことを明日からの教育実践に生かしていきたい。
- 安部先生の心温まる話、親しみやすい語り口に気がつくとき引き込まれた。親子の愛、人と人とのふれあいや出会いの素晴らしさを学び直した気がした。多忙な毎日を過ごしていく間に心や体がすり減っていくような感覚がある。しかし 安部先生のように先人や関わってきた全ての人をリスペクトしてゆく生き方ができれば、きっと豊かな人生を築ける仕事ができると思った。もう一つ感心したのは 聞く者の心にストンと落ちる話術（テンポや声の大きさ）の素晴らしさ。パソコンや映像を使わずに手書きの資料のみで90分間 私たちをひきつけた講演、久しぶりに良い話を聞いた。
- 幕末から明治にかけてここ中津で生まれた偉人のエピソードをもとに、多様な切り口で「人を育む」ということの尊さを教えていただき、心洗われる思いがした。最近忙しさの中で自分の物差しで人や施策をけなし、マイナス思考の発言が増えていたことにも気づかされた。音楽の調べのような安部先生の講演に心が浄化された気になった。
- 安部先生の言葉は力強く暖かい。それは先生の人生の中で先生ご自身が縁をつなぎ、人との関わりの中で体得された言葉だからだと思う。私もたくさんの先輩同僚、そして子どもたちから真摯に学んで、すべての子どもたちがそれぞれの花を咲かせられるように日々精進したい。
- これまでの人生の中で学んできたことやたくさんの教訓があり、教育者として人としての優しさや慈愛に満ちたご講演だった。耳が聞こえないご夫婦にお子さんの耳が聞こえないと手話通訳をした際の話、諭吉の母の虱取りの話が心に残った。一方的なものの見方をすることなく、優しさや謙虚さを持って自分自身も成長していきたい。
- 中津の歴史人の生き方を通して、教育に関わる話題を交えながら、人との関わりや大人が子どもにしてやれることをユーモアあるお話だった。大人や教師がしっかり信念を持ち、それを真剣に子どもに姿で見せることの大切さ。自分本位ではなく、相手の視点、多角的な見方をしていくことの必要性を改めて感じ、自らの日頃の業務を振り返ることができた。
- 20年ほど前担任した聴覚しょう害の生徒とコミュニケーションを取りたくて、手話教室に通った。その時の講師の先生が安部恭一先生でした。優しい語り口で、わかりやすく、丁寧に指導していただいたことが思い出される。安部先生の人間性、教育者としての変わらない姿に再会できた。
- 信条、指針、提唱などを分かりやすく表現していて、一生心に残る言葉になると思いました。

第1A（小）分科会 教育課程に関する課題

提案主題 コロナ禍でのカリキュラムマネジメントにおける教頭の役割

協議の柱 コロナ禍での教育課程の実施に向けて、教頭としてどのような役割を果たすべきか

提言者 大分市立坂ノ市小学校 教頭 久々宮 浩 之

1 感想

- (1) 大単位によるカリキュラムを整理することで学年のつながりと若手の育成を進めていることが非常に有効に感じた。学年内でのカリキュラムマネジメントを進めることから教科部会にさらにつなげていくことが必要です。
- (2) コロナ禍で地域人材の活用をどのように行うか。学年間の交流をどうするか、小中学校間の交流をどうするか。最初から無理だと諦めるのではなく、条件（人数、場所）や方法を工夫すれば取り組めることを感じました。
- (3) 狙うべき教育課程の見直しに近づくための組織・運営も明らかになっていました。
- (4) コロナ禍の中、職員の困りの声を拾い上げ、授業進度調整のため、教科等横断的な視点に立って教育課程再編成の方向付けをリードしたことがすばらしい。その結果、授業進度、学年の結束力、OJTも充実して、ピンチをチャンスに変えることができました。
- (5) 学年会を話し合う内容によってAとBに分け、学年会Bの中で、定期的に教育課程の検討を行う場・時間を設け体制を整えたことが、教員一人ひとりのカリキュラムマネジメントの意識や同僚性の向上に繋がったと感じました。
- (6) 「コロナ禍」というピンチをチャンスに変えて、「教科横断的な視点」での教育課程の実施、教職員一人ひとりの意識改革、そして組織力の向上ができたことが成果です。
- (7) 授業時数不足の状況下に教科横断的な視点で組み立てた学習計画により、教育課程の完全実施を行っています。また、教科横断的な視点での実践により教員に定着できている点も素晴らしいです。臨時休業下で行える作業の立案や提案もとても参考になります。
- (8) コロナ禍において地域学習・体験学習に替わるものとして教育コンテンツの活用に着眼し、授業効率を高め学習進路の遅れを取り戻しています。また、実施状況の評価改善を図る手段として分掌会議を計画的に位置づけています。カリキュラムマネジメントの成功例であり、参考になる事例です。
- (9) 臨時休業等に伴う授業時間の確保と効果的な教育課程の編成と実施状況が具体的に記述されています。教頭を中心として、様々な情報収集を行い、実施の方向性を示しながら教職員がベクトルを合わせていく組織的な実践です。緊急事態の中、見合わせる活動を見極め、その替わる活動を工夫するという、子供の立場に立った教育課程の編成・実施のあり方は素晴らしいです。「学びを止めてはならない」「学校の主役は子供です」という強い願いや思いがコロナ禍を乗り越えていく原動力となったと思いました。

第1A（中）分科会 教育課程に関する課題

提案主題 小中9年間を見通した教育課程の編成

サブテーマ 一原川中学校区小中一貫教育における教育課程の編成

協議の柱 (1)(2)についての教頭の役割

(1) 教育課程編成のPDCAサイクルに学校評価の結果を取り入れる方法

(2) 他の校区の現状について意見交換

提言者 大分市立原川中学校 教頭 糸 永 秀 章

1 感想

- (1) 小中での時間を確保し、教科部会の開催や領域部会を開催することで、児童・生徒の円滑な育成につながると思います。教頭・主幹教諭を中心として、小中の連携をどのように進めていくか、また、コミュニティスクールをどう活かして行くかが求められていると思います。
- (2) ipadの使用に関する指導を小中は連携する必要があります。継続的な指導が必要で、小中連携の元指導内容を話し合っていきたい。
大分市は9年間を見通した教育課程を作成しているところなので、「情報モラル」や「情報ツール」の取り扱いに関する指導計画を作成してはどうでしょうか。
- (3) 小中一貫は間違いなく「学力向上」や「生徒指導」に効果があることが意見交流を通して確認できました。9年間を通しての目指す子ども像の明確化が必要です。
- (4) 小中一貫の取組がよくわかりました。今後、9年間を見通した教育活動の必要性を強く感じました。小学校・中学校の「統一のきまり」（ICTを含む）は今後、加速していく必要があることを再認識しました。大分市1丁目1番地の活動として今後も推進してください。
- (5) コミュニティスクール化に向けて、学校評価を生かすことは必須であり、また連携の観点から中学校区内の各小学校との合同研修会は意義があります。教育課程の中に位置づけるサイクルづくりは、教頭の仕事の効率化のためにも必要だと思います。
- (6) 2年間の多くの取組で授業規律に対する生徒の意識を変えることができたことは素晴らしいと思いました。
- (7) 小中9年間を見通した教育課程の編成を工夫して学校間の縦の連携を深めていくことで、学校教育の質が向上し、生徒の意識が確実に変化しています。義務教育9年間を見通した小中一貫教育に向けた教育課程委編成の重要性について再認識しました。また、自校校区における小中連携のあり方に示唆をいただきました。
- (8) 原川中学校区の小中一貫教育の様子がよくわかりました。原川中・日岡小・桃園小の3校が「原川スタイル」でしっかりと繋がり生活・学習両面で9年間を見通した目標をもって実践をしています。小中一貫教育は「大分市の1丁目1番地」の取組なので、原川中学校区の実践例を取り入れて、実りある活動へ繋がりたいと思います。
- (9) 多様な生徒は増える中、小中間において生徒個々の情報の引継や一貫した学習指導、生徒指導等は大変重要です。そのための具体的活動のヒントをたくさんいただきました。各種調査の分析によって年代ごとの指導の重点が明確になっています。

第1B(小)分科会 教育課程に関する課題

提案主題 「主体的な自己実現」を図る教育課程の実現をめざして
サブテーマ ーキャリア教育と郷土学を中心としたカリキュラム・マネジメントー
協議の柱 教頭として、カリキュラム・マネジメントにどのように関与すべきか。

提言者 豊後大野市立新田小学校 教頭 羽田野 康 治

1 感 想

- (1) 教諭と地域の方々と管理職が丁寧に大切に子供たちの成長を支援している様子が伺えました。教頭が大きくドーンと構え、校長をも包み込むような心持ちが必要なのだろうと反省します。今日からの自己の姿勢に活かしていきたいと思います。
- (2) 小規模校の実態を生かした校内体制づくりやコロナ禍の実践のマネジメントが工夫されています。時間をうまく使いながらの会議の行い方も参考になります。教頭として、地域と学校をつなぐ役割は大変だが、上手にマネジメントされ、それを教職員が引き受け、実践につなげているところが良いと思いました。
- (3) 小規模校のメリットを生かし、臨機応変に企画会議を開催し、職員間の対話を引き出すことで実践につなげていた。
- (4) 小規模校ならではの地域の方々から多くの協力を受けていることが素晴らしいです。教頭がコーディネーターとして地域と学校を結びつけ、教頭自身が地域のことをとてもよく知っています。自分ももっと地域のことを知らないといけないと感じました。
- (5) 学校や地域の当面している課題を企画会議・運営委員会・校内研修と連動させて、地域や市を巻き込んだ取組をしていることが参考になりました。学校存続のための外部団体協議会があることに驚きました。地域愛の大きさを感じました。
- (6) 学校の中で企画会議や運営委員会が芯の通った組織として機能していると感じました。その決定を受けて研究主任や教務主任・地域との連携担当など、それぞれの教員が自分の役割を実行しているのが素晴らしいと思います。また、地域資源を生かした教育課程について、共通理解や実践の仕方について詳しく述べられており、大変参考になりました。
- (7) 「歩く地域資源の宝箱」のような教頭ですね。以前勤務していたたくさんの情報を持っていたからと話していたが、前回勤務の時点から使える人材を探しながら仕事をしていたのだなと感心させられました。人材育成の観点から教頭がたくさんの引き出しを持っていることは大きな力だと考えます。日常の人との繋がりが感じられ、日々の努力が宝箱を生むのだなと感じました。
- (8) コロナ禍の中、教頭が先を見通して職員にアドバイスをし、しかも子供たちにつけるべき資質・能力がしっかりと身につけているところが素晴らしいと感じました。郷土学に対する職員への意欲化を図るため、校内のジオサイト関連学習を計画させ、まず職員が自分たちの勤めている地域に惚れ込むことから職員同士の会話が増えて、子供も意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになったところが、今後コミュニティスクールを導入していく上で参考になりました。

第1B（中）分科会 教育課程に関する課題

提案主題 教職員・生徒・家庭・地域、全体で取り組む学校づくり
サブテーマ ー学校教育目標が具現化された教育活動のための教頭としての役割ー
協議の柱 組織や仕組みを効果的に実働させるための教頭の役割

提言者 竹田市立竹田南部中学校 教頭 渡 邊 幸 美

1 感 想

- (1) 教頭がアイデアを出し、教務主任と連携してカリキュラムマネジメントを進めているところが参考になりました。職員全員が自分の思いを出し、お互いに話し合い、学校教育目標につなげていく作業は生徒実態の見直しや職員の思いの共有に繋がったと思います。
- (2) 職員研修を計画的に行い、一人ひとりが主体的に研修に参加できるよう日常の授業の手法を取り入れたことで、日頃の実践にも繋がる取組になっていました。
- (3) 学校教育目標設定までの過程がよく分かり参考になります。全職員で生徒の実態を出し合うことからスタートして、資質・能力別に分けて明らかにしていく、計画的に進めていくことが学校経営に参画しているという職員の意識を向上させていて、とても良いと感じました。
- (4) 教頭のアイデア、マネジメントが素晴らしい。学校全体のことを管理職だけでなく、教職員・生徒も書き込んで考えさせているところに「生徒ファースト」の意気込みを感じました。教頭の役割は「これだ!」と決められるものではなく、また際限はないが、学校の中の「すきま」を埋められるとよい。しかし、隙間が多すぎると辛くなってくる。協働が大切です。
- (5) 先進校から学び、自校にうまく取り入れることができています。若い教職員が多い中、生徒の実態を十分に分析し、課題解決のために徹底する事柄を共通理解して、全員で取り組んだことが学校運営に参画している意識づけに繋がっています。組織や仕組みが十分効果的に実働していると感じました。
- (6) 全職員で4点セットを作成していることで、教職員全体のベクトルの方向性や取組の焦点化が図られています。
- (7) 教職員のベクトルを同じ方向に揃えていこうとする取組がよくわかります。教職員間の研修でジグソー法等を使い、すべての教職員が主体的に意見を出し合うことができる工夫がなされています。若手教職員を育てるという意味でも有効だと思います。
- (8) 他市の学校を視察し、先進的な取組から学ぼうとする意欲は素晴らしいと感じました。先進校視察によって他校に実践に学んでそれを取り入れていくことは学校活性化のために必要です。
- (9) 生徒、学校に実態から課題を洗い出すために、職員全体で一体となって取り組むことで、教職員のベクトルを調整したことが成果に繋がっています。
- (10) 新学習指導要領全面実施にあたり、これから求められる力と生徒の実態をよく精査することは本当に大事なことだと感じました。

第2 A分科会 子供の発達に関する課題

提案主題 支援を要する児童への組織的な対応と教頭の役割について
サブテーマ 一校内の体制づくりと保護者・関係機関との連携—
協議の柱 特別な支援を必要とする児童に対して組織的な対応を行うために、
教頭の役割はどうあればよいか。

提言者 宇佐市立封戸小学校 教頭 穴 瀬 直 子

1 感 想

- (1) 発達支援センターの「訪問支援」システムを活用することによって、支援方法のアドバイスをいただき、指導に生かすことができていました。また、その回数を重ねて連携していることは指導に大きな効果をもたらしています。小規模校の良さを生かし、全教職員による情報交換を多く行うことで、支援を要する児童について共通理解することができ、どの職員も同じように支援することができていることは素晴らしいです。
- (2) 校内での支援体制として定期的に「特別支援教育推進委員会」を開催し、教頭が調整役となったところに組織的な対応ができています。特別支援コーディネーターや教育相談コーディネーターにいかに関わってもらえるかが課題というのは同感です。
- (3) 入学してくる幼児がいる園や保育所等と連携し、地域で支援する体制ができています。教頭が細やかに目配り・気配りして校内組織をうまく機能させています。
- (4) A児自身と保護者の困りや不安に応え、組織的に動けたことがA児の今の様子に表れていると感じました。教頭が支援体制の組織の先頭に立つのではなく、特別支援コーディネーター、教育相談コーディネーターの動きをどう支援するか、コーディネーターをどう育成するかが課題で、自分も共感するところが大きいです。
- (5) 学校が組織的に動くために教頭として、各種コーディネーターや主任などに役割と責任をもたせ、動かしていくことが大事だと感じます。それをマネジメントしていくのが教頭としてすべきことだと思います。保護者・地域との繋がりを生かすことも必要だと思います。そうしたことがよくわかる提言でした。
- (6) 校内の組織的な対応はもちろん関係機関との連携が円滑に行われており、教頭として現状把握がしっかりできています。アンテナをしっかりと立て、現状を把握し、いろいろな対応がとれるように引き出しを多く持って対応していくことが子供の成長に繋がることを改めて認識できました。
- (7) 特別な支援を必要とする児童に対して組織的な対応を行っていることがうかがえた。その中で教頭が連絡調整、進捗状況の確認等様々な場面で重要な役割を果たしています。また、A児のことを教頭自身がよく理解しており保護者対応を行っている点は学ぶべきことだと思います。課題も明確に示されていて多いに参考になりました。
- (8) 園や地域総合支援センターとの連携、保護者対応等の連絡調整やとりまとめを教頭が担い、校内体制づくりや情報交換の場の設定もきちんとできています。
- (9) 素晴らしい提言を知ることができて参考になることも大変多くありがたく思います。多様化する個別のニーズに応えるため、教頭として全体をしっかりと把握しながら、組織的な対応ができるよう体制を築いていく必要があると痛感しました。

第2 A分科会 子供の発達に関する課題

提案主題 特別な支援を要する生徒への組織的・協働的なかわりについて

サブテーマ 一分析ソフトの利用と関係機関との教頭のかかわりー

協議の柱 教頭として。支援を要する生徒へ配慮するために、どのようなかわりが必要か

提言者 中津市立緑ヶ丘中学校 教頭 小 倉 英 志

1 感 想

- (1) 学校の実態、地域の実態に合わせて子供たちにどんな力を付けていくかが全教職員に共有され取り組まれています。また、分析ソフトによるデータとして数値化されているため、説得力のあるレポートになっています。教頭としてコーディネートしていることがよくわかる提言でした。
- (2) 学力状況を継続的に分析し、校内で共有することによって、また個別の指導支援を共有することによって組織的相談体制や学習支援を進めています。
- (3) 全員活躍型の授業を取り入れたことで子供の意欲に変化が見られる。今後も継続した取組を期待します。
- (4) 課題解決に向けて分析ソフトの開発・利用を行い、可視化した取組ができています。継続した取組が大切なので、異動後の意識共有が重要だと思います。
- (5) 学力状況を分析して可視化することで説得力のあるものになり、学習支援体制の構築に繋がっています。
- (6) SC、SSW、園、福祉関係等内外との連絡調整・情報共有するためのシステムづくりも重要です。
- (7) 特別の支援を要する子供への関わりについて学力支援を中心に心のケアや貧困など家庭が抱える課題への支援という視点で提言されています。定期テスト分析ソフトによるデータ分析も活用している点が興味深く感じました。
- (8) 二人教頭が役割分担を行うことでそれぞれの立場で窓口を一本化できしており、関係団体や専門機関との連携もスムーズで、組織的な取組ができています。
- (9) 支援の必要な生徒に対してのデータにも続いた指導等、教頭としての関わり方に見習う点が多々ありました。
- (10) 課題から日々の「心のケア」と「学習支援」の必要性が感じられた。課題解決に向けて、学校としての組織的な取組、関係機関との体制の構築・連携が重要です。
教頭として実態の分析、日々の教職員・関係機関との密な連携とともに、個別支援・配慮の検証・改善が必要です。今後は「特別な支援を要する生徒」が増加すると予想されるので、今回の提言は大変参考になります。
- (11) 特別な支援を要する生徒たちが将来自立するために、日常的な「心のケア」と「学習支援」による配慮が必要であるという捉えから、実態を分析し、教職員や関連機関と協働するいくつかの手立てや方法を示していただき、とても参考になりました。
- (12) 特別な支援を要する生徒は「心のケア」「学習支援」の両面からの支援が必要で、園実態把握に「分析ソフト」を活用することは有効であると感じました。

第2B分科会 子供の発達に関する課題

提案主題 特別支援教育をもとにした小・中の連携をどう進めるか

サブテーマ ー由布市「心の教育」の推進と教頭の役割ー

協議の柱 教頭として、特別支援教育をもとにした小・中連携をどうすすめるか

提言者 由布市立石城小学校 教頭 竹 中 靖 典

1 感 想

- (1) 特別支援教育をもとにした小中連携では情報共有を密にして指導や支援が途切れないようにしていくことが大切なことを改めて感じました。
- (2) 教頭自身が児童と接しながら関係機関と連携した取組でした。他とのパイプ役・つなぎ役としての教頭の役割を強く感じる事ができたレポートでした。
- (3) 教頭として、子供を中心に、①家庭・保護者・関係機関及び小学校・中学校の連携をよくする ②担当の教職員の状況に気を配り支える、ことがよく分かりました。
- (4) 心の教育を進めていくために、まず教頭は実態をよく知ること、市の関係機関と学校をつなぐためのパイプ役に徹していくことが大切だと改めて感じました。
- (5) 特別支援教育に軸足を置いて教育活動をする事は、今日の学校事情としてはとても大事なことです。そのために情報の共有や関係機関との連携、本人への関わりなど、行うべきことはたくさんあります。現状ではコーディネーターは教頭が担当しているが、本来的には担任以外のコーディネーターの人員配置を望みます。
- (6) 特別支援教育に関する学校内外での教頭の役割として、「関係機関と校内の特別支援コーディネーター等とのパイプ役」「6年生児童の状況の中学校への早期伝達」「補助教員の支援状況と困りの把握」「本人及び保護者の相談役」など、いろいろな視点から提起していただいた。特に、全校児童の状況を把握できるという利点を生かし、本人・保護者・担任と繋がり、支援に結びつける取組は参考になりました。また、このように教頭会の中で情報交換ができると、それぞれの学校の参考になり、小中連携も進むと思います。
- (7) 由布市の「心の教育」を推進して行く上で、校内では特別支援コーディネーターや教育相談コーディネーター、校外ではSC、SSW、児童相談所等の関係機関との連携が重要です。教頭として、各担当・各関係機関とをうまくつないで行くことが重要な役割なのだと大変参考になりました。
- (8) 不登校児童生徒を市全体の課題と捉え、解決のために特別支援教育コーディネーター、教育相談コーディネーター、更に関係機関と連携し、教頭がパイプ役として繋いでいくことの大切さを感じました。
- (9) 近年増加している特別支援学級への進級を希望する児童の保護者に対して、安心感を持ち現状を伝え、学校が組織として迎え入れる実践報告で参考になります。
- (10) 教頭が就学支援の中心となり、保護者・園・中学校・支援学校・市教育委員会と連絡を取りながら、児童一人ひとりの現状を丁寧に把握し、学級につないでいった実践に敬意を表し、学んでいこうと思います。

第2B分科会 子供の発達に関する課題

提案主題 不登校生の学習支援の在り方

サブテーマ 一鶴中版アウトリーチの取組を通して

協議の柱 不登校対応のための組織を生かすうえでの教頭の関わり方について

提言者 別府市立青山中学校 教頭 大塚 史朗

1 感想

- (1) 不登校対応について、組織的に対応することの大切さと難しさを改めて感じました。子供一人ひとりの状態を正確にみとり、的確に対応することが大切です。
- (2) 不登校生徒の学力保障を念頭に置いた学校あげての取組として大変参考になる事例でした。
- (3) 不登校生徒の対応として鶴中アウトリーチの取組は大変素晴らしいと思いました。教職員を組織的に動かす教頭の役割も見事に果たされていると感じました。
- (4) 鶴見台中学校の不登校生徒に対する取組がとてもよくわかりました。「鶴中版アウトリーチ」という独特な取組を学校全体で行っているのがいい。地域児童生徒支援コーディネーターを有効に活用し、地域の施設を利用している。また、アウトリーチという別府市の不登校対策で大学生の協力を得ているのが素晴らしいと思いました。協議を通して、各学校ごと不登校に対して様々な取組をしています。共通の話題は不登校生徒が学校に来たときの場所の確保・人員の確保だとわかりました。
- (5) 不登校に関してはどの学校も様々な工夫をしながら学力保障や登校支援を行っています。鶴見台中学校の「鶴中版アウトリーチ」の取組は学校近くの公民館を使うことで、不登校の生徒も参加しやすく、非常に参考になりました。
- (6) 不登校生徒の復帰を目指し、生徒一人ひとりの抱える課題を分析しゴールを設定したこと、チーム学校としてそれぞれの役割分担を明確にしたこと、その中で「一人で抱え込ませないための工夫を行っていること、一方で各専門機関と連携をとっていること、教頭として一から組織作りを行っていることなど、大変参考になりました。
- (7) 不登校生徒一人ひとりの状態やそのニーズに応じて「アウトリーチ」の取組を実施していったことで、生徒各自に寄り添う取組になり成果を上げています。
- (8) 不登校児童・生徒の問題は小・中学校共通の教育課題です。その中で、本レポートが示している校内の組織的な体制づくりやアウトリーチの取組、外部機関との連携等どの学校でも何らかの形で取り組める内容であり、その子の困りに寄り添うことが大切であると改めて感じました。
- (9) 不登校の状況に応じた2種類のアウトリーチの取組は、多様な要因を抱える不登校生への支援の在り方として具体的で大変参考になりました。
- (10) 不登校生徒への対応、支援のための組織作りに対する教頭の立場・関わり方がよく見えました。不登校生徒のそれぞれの状況を分析し、学校だけでなく外部機関との連携がうまく行っている好事例であり、成果も十分出ています。外部機関及び各種コーディネーターをつなぐ教頭としての重要性を改めて感じました。

第3 A分科会 教育環境整備に関する課題

提案主題 児童生徒と向き合う時間確保のための働き方改革と教頭の役割

サブテーマ ーコロナ禍における学校業務システム構築と学校・家庭・地域の協力体制の充実を考えるー
協議の柱 教頭として、教員が子供と向き合う時間をどのように確保させるか

提言者 大分市立賀来小（中）学校 教頭 廣 田 秀 俊

1 感 想

- (1) 子供と向き合う時間を確保するための方策として、行事・授業・働き方改革を含めた学校の在り方を考えていかなければならないと感じました。
- (2) 大変詳しい説明があつて、学校の取組がよくわかりました。ICT活用や教科担任制などの推進によって、学校の働き方改革を進めることの大切さを再確認できました。
- (3) 業務の見通しや教科担任制で参考にしたい内容が多くありました。学校として、多くの取組を先進的にされています。
- (4) 児童生徒と向き合う時間確保のために学校業務システム構築と地域等との連携の視点の上でレポートするととても参考になると思います。教科担任制・意識改革・地域・保護者との連携の取組が参考になりました。
- (5) さまざまな取組で課題解決を行っていることがよくわかりました。
- (6) 「本校の重点施策」が参考になりました。特に小中一貫校として中学校のノウハウを生かした教科担任制の推進は参考にしたい取組です。「プロジェクトチームの実働」では「目標」「活動内容」が明確に設定されていて参考になりました。また、働き方改革についても具体的な取組はとても参考になります。
- (7) 児童と向き合う時間の確保のための働き方改革に関して、運動会の時期や文化発表会のリモート業務に見直しは参考になりました。小中一貫校として教科担任制がスムーズにできておりたくさんの方のメリットを見ることができました。
- (8) コロナ禍の中で学校業務システムがきちんと構築されていることで、授業改善や働き方改革が進められていることは大変素晴らしいです。必要なスタッフの確保、学校独自の学習ボランティアや安全・安心の見守り、行事に関するサポートの確立など興味深い取組が多くありました。
- (9) カリキュラムマネジメントで働き方改革を進める取組に興味を持ちました。
新学習指導要領施行に合わせて、育成すべき資質・能力の観点で行事の精選を行い取組を絞ったり、指導する教科を少なくすることによって教材研究の時間を確保したりして働き方改革を進めるとともに児童生徒の学力アップにも繋がっていることは参考になります。
- (10) 働き方改革を進める上で、チーム学校を活用しながら、授業改善やICTの活用、行事の見直しなど、教頭が中心となって積極的な提案や実践が行われていることがとても参考になりました。
- (11) 昨年度提言者とともに協力したことは、教職員が子供と向き合う時間をいかに増やしていくか、であった。成果として、長時間勤務を8%縮減することができました。

第3 A分科会 教育環境整備に関する課題

提案主題 生徒の登下校時の安全を守る方策をどのように行うか

サブテーマ ー自転車通学生への取組を通してー

協議の柱 生徒が安心して安全に登下校するために、教頭として家庭・地域・行政と連携した取組をどのように行うか

提言者 大分市立大東中学校 教頭 内 藤 俊 章

1 感 想

- (1) 登下校中の子供たちが事故に巻き込まれるケースが増えています。子供たちを登下校中の事件・事故から守っていくためには、学校・地域・行政がより一層連携した取組が必要です。学校運営協議会を中心とした取組が今後重要になってくるのではないかと思います。
- (2) 全校生徒1250名の大規模校の通学指導とその環境整備の大変さを知ることができました。通学は教職員の勤務時間外のことなので、対応が難しい。教職員の勤務時間と児童生徒の通学登校時間をそろえるべきだが、現実はそうっていないことに大きな問題があります。
- (3) 登下校の指導に関する業務と働き方改革の矛盾について深く考えさせられる内容でした。保護者ボランティアや学校運営協議会の活用を考える参考になります。
- (4) 大規模校における課題と現状の取組がよくわかる内容でした。協議の柱で実際に協議を行うと議論が深まる内容だと思います。
- (5) 大東中学校は自転車通学生が多いことで、職員も定期的な登校指導をやらざるを得ない状況です。教頭として、保護者・地域・行政に十分働きかけているが、解決の方向性が見つけられずに苦慮しています。2年後のコミュニティスクールに向け、課題を学校外と共有し、保護者や地域が主体的に取り組む方向に進んでほしい。
- (6) 通学路は学校の管理下なので、登下校で起こる問題は学校に委ねられているという現状はどの学校も同じですが、このレポートでは保護者や地域、行政、関係機関とよく連携した取組だと感じました。
- (7) 心身の不安定な状態が事故の原因になると考え、生活ノートやいじめアンケート等をもとに生徒への心理的・精神的な心のケアを行っていることは参考になりました。
- (8) 風通しの良い職員集団をつくるための「報告・連絡・相談」体制の確立にあたり、教頭が縦・横の連携が上手くいくように調整や声かけを細かくしている様子が目に浮かびました。当たり前のことを当たり前に組織していったとあったが、「直近の1日間を記入できる行事黒板」は、異動で入れ替わりのある学校現場では抜けがちな部分を予防するよい取組で、参考になりました。
- (9) 児童生徒の安心・安全は学校教育の基礎ですので最も重要視されねばなりません。登下校の安全指導の中で、「人的要因」の取組では安全指導を超えて生徒の心のケアにまで及ぶ取組です。「環境要因」の施設改善については要望通りにならないことが多い中で施設改善ができています。「車両要因」の自転車安全点検では学年部を機能させて丁寧に実施しているところを見習いたいと思いました。

第3B分科会 教育環境整備に関する課題

提案主題 学校教育目標を具現化する組織的な取組における教頭の役割
サブテーマ ー学校及び児童が抱える問題を改善・解決する主体的な専門部活動の活性化をめざしてー
協議の柱 学校及び児童が抱える問題を改善・解決する専門部活動を中心とした組織的な
取組をつくるとともに、実働活性化するための教頭の役割はどうあればよいか

提言者 日田市立咸宜小学校 教頭 加藤 慶一

1 感想

- (1) 全ての会議を水曜日に集約して、他の曜日を活動の時間に充てるというのはとても興味深い取組だと思います。分掌部からの起案を管理職等でチェックして提案という流れにしているのも、上意下達の意識にならないのならスピーディに進められるのだろうと感じました。
- (2) 年度の途中で専門部会を3→5に再編成したことがとても興味深く参考になりました。やりながら、うまくいかないところをよりベターになるように変えていくことが、本当の意味で活性化していくと思いました。
- (3) 会議や研修等を水曜日に集中させています。他の曜日の放課後を自由に使えていた。主任が自主的に動く土台ができていてうらやましかった。
- (4) 一つのシステムを創りあげても職場の人員構成によって機能しなくなることがあります。そこを年度途中にPDCAサイクルに沿って変更したりする柔軟性が素晴らしいと感じました。会議を水曜日に集中させ、業務を圧縮させる取組を本校でも推進していきたいと思いました。
- (5) 専門部を3→5に増やし、より組織的に教育活動を実践していくPDCAサイクルを実践し、成果をあげることができています。教頭として、学校組織を十分に運営しています。
- (6) 重点目標達成のため、年度途中で専門部を再編成してPDCAを回すスケジュール管理をしていったその迅速な対応に感心しました。「うまくいかない時は年度途中でも改善・修正をしていく」そのリーダーシップをとって行動していくことが勉強になります。「実効性・効率化」というキーワードを意識してレポートを読ませていただきました。
- (7) 学校教育目標を具現化するには学校組織をどうつくり、活性化させるかが課題です。いうなれば組織マネジメントが教頭の役割です。トップが考える目標や取組等を専門部長がしっかり解釈し専門部内で共通理解しながら取組を進めていくことが大切です。本レポートは専門部を3→5に再編成することで、より具体的に細やかに子供たちに接し、繋がることができ、教職員も焦点化できるという点で参考になります。
- (8) 前年度踏襲の専門部を学校教育目標達成に向けて見直すことは必要ではあるが、教頭が意識を持って強力に進めて行かないと実現しにくい。これこそ、年度を跨いだ取組です。
- (9) 学校の課題から専門部を3から5に増やすという組織改革は、教職員の共通理解を図ることが大変だったのではないかと推察します。

第3B分科会 教育環境整備に関する課題

提案主題 「働き方改革」実現に寄与する教育環境整備にむけた教頭の役割
サブテーマ ーICT機器等の整備及び活用と時間確保にむけた取組ー
協議の柱 「働き方改革」実現に向けて教頭の役割はどうあればよいか

提言者 玖珠町立塚脇小学校 教頭 穴 井 有 司

1 感 想

- (1) GIGAスクール構想にも係るICT機器の活用については今後取組を進めていかねばならないところだと思います。
- (2) 放課後の時間の確保に独自の取組があった。ICT機器を物理的に揃えることで効率化が図られていました。
- (3) ICT機器等の整備、効果的な活用によって時間の確保を的確に実践しています。働き方改革での教頭の役割を果たしています。
- (4) ほんのちょっとした印刷業務だったり、連絡の周知だったり、それをひと工夫することの積み重ねで、働きやすくなる環境ができていくんだと感じました。「時間の確保」と「どこに時間をかけるか」の軽重が難しいと思います。
- (5) ICT機器の活用、時程の改善、教職員の意識改革等をバランス良く行っているからこそ、超勤時間の縮減、取組の推進が実行できていると思われます。その要となっているのが教頭の力量なのだと感じました。
- (6) 働き方改革において現場でできることは限られており、実行できることはすでにやっているという感覚はあります。このレポートでは教頭は、それでもその年度・その都度工夫できることはないかと知恵を絞って努力しています。管理職にできることはこの努力の積み重ねであろうと思います。管理職が知恵を絞って改革の努力を積み上げる姿を見せることにより、少しずつ引っ張っていきけるのだと思います。ICTが整備されつつある今だから教頭が率先してそれを駆使していくところに共感し、エネルギーをもらえました。
- (7) 主幹教諭の経験を生かして、PT会議や各部会・委員会の提案事項の精選や運営の見直し、ミドルリーダーの育成等の学校組織マネジメントが進んでいる様子が伺えました。大分県教育委員会の期待する教頭像がここにあるように思いました。
- (8) 印刷機等従来からあるものの性能については「変わらないもの」「仕方のないもの」という先入観があります。それを取っ払って「働き方改革」を進めることは素晴らしい。もう一度、職員室の中・学校の中を見直していき、改革を進めたいと思いました。
- (9) 「働き方改革」の実現に向けた教頭としての取組が素晴らしい。
- (10) 教職員が毎日「元気な姿で子供たちの前に立つ」とともに、「子供たちと向き合う時間を確保するためには、日常業務の効率化を図ることが事情に重要だと思います。ICT機器の有効的な活用法を考え実践に移していること、前年度まで行われていたことを全て踏襲するのではなく、実のある部分を淘汰し、実働していることなど、大変参考になりました。ICTの活用はスキルを高める研修とセットで取り組んで行かねばならないと思いました。

第4 A分科会 組織・運営に関する課題

提案主題 “チーム高小”で課題解決を図るための教頭としての役割
サブテーマ ミドル・アップダウン・マネジメントの実働をめざしてー
協議の柱 学校教育目標達成に向けた組織づくりとその組織をミドルリーダーとともに
効果的・効率的に進めるための教頭の役割は、どうあるべきか

提言者 豊後高田市立高田小学校 教頭 近 藤 哲 司

1 感 想

- (1) “チーム高小”をより強くするために、若手を育て、型にこだわらない会議の持ち方等、時間と人を上手にマネジメントされています。
- (2) ミドルリーダーの育成に向け、分掌主任に年齢を問わず任命し、主任同士の協議ができる組織づくりをしています。その調整役を教頭中心に行っているところを学校に持ち帰り今後に生かしていきたい。
- (3) チーム学校ではなく、“チーム高小”として自校の特性を生かしたミドル・アップダウン・マネジメントができていると感じました。PTAを保護者会に訂正するかという話がでたが、有効に機能していることで、「PTAでよいのでは」という結論に達しました。「部会を超えた課題把握できるシート」や「スタンドミーティング」など参考になりました。
- (4) 若年層を取上げてリーダーにすることで、人材育成に繋がることが参考になりました。職員との連携の取り方も参考になりました。
- (5) どの学校もミドル・アップダウン・マネジメントが機能する組織の在り方に困りがあるということがわかりました。部会を超えた課題を把握するためのシートの活用や定例の部会のみならずスタンドミーティングを重要視した取組など、組織的に課題解決に取り組む体制づくりが参考になりました。
- (6) 教頭が主幹教諭をはじめ各主任の自覚を促し、ミドルアップダウンと人材育成を共に進めていこうとする様子がよくわかりました。
- (7) 目標協働達成のため組織体制の整備を進めていること、主任同士の協議を促したり、学年主任を含む「拡大運営委員会」の進行・管理やPTA専門部との連携を具体的に進めていることが参考になりました。
- (8) 教諭は主任に、主任は管理職に相談報告連絡を行い、ミドルリーダーが建設的な提言をだすなどミドル・アップダウン・マネジメントが実働しています。また、教頭が積極的に保護者や学校運営協議会委員と連携し、地域と共にある学校として尽力している姿勢が素晴らしいと思います。
- (9) 観点Ⅲの主任等が効果的に機能する学校運営体制（ミドル・アップダウン・マネジメント、効果的・効率的なチーム体制の構築）及び観点Ⅳの学校・家庭・地域による協働達成（目標の協働達成）の具現化に向けての取組が工夫されています。
- (10) 分掌部会用「会議シート」は目的を確認し取組内容や現状についての情報・意見交流を進める上で有効です。課題意識の共有が特に重要且つ困難であることから、児童の実態に関する具体的な情報に基づいた実践の交流を意識する必要があります。

第4 A分科会 組織・運営に関する課題

提案主題 ミドル・アップダウン・マネジメントが機能する組織の在り方について
協議の柱 重点目標等の達成に向けた検証・改善・進行管理における、ミドルリーダーと
教頭との連携はどうあるべきか

提言者 宇佐市立西部中学校 教頭 長 尾 大 介

1 感 想

- (1) 課題を解決するために、縦と横の組織を上手くつなげていく、その中心に教頭が存在し、役目をはたさされていました。
- (2) 学校教育目標達成に向け、風通しの良い職員集団で、縦・横の連携を教頭が中心となって実践されています。今後は教頭の立場から、ミドルリーダーとなる学年主任への声かけが重要であると感じました。
- (3) 縦の連携と横の連携を有機的にどう機能させるか、教頭の果たしている役割の重要性を再認識できました。学校運営や各部会の進捗状況の「見える化」が有効な手段だと感じました。「分掌主任にいかにやりがいを持たせるか」「ミドルリーダーと教頭の連携」については、更に進める必要があります。
- (4) 縦と横の連携をいかにとるか大変参考になりました。ミドルリーダーを上手く生かすことの大切さを感じました。
- (5) 教頭の組織への関与性を、縦の連携と横の連携の視点から見直し、具体的な方策を通して「風通しのよい職員集団」により近づいている様子がうかがえました。
- (6) 組織として課題解決に向かうために、ミドルリーダーをどのように活用していくのか示唆をいただいた。日頃からの会話や人間関係を大事にして職員の協力を得ることの必要性を感じられました。
- (7) 情報をいかに正確に伝え、素早く共有化を図るか特に若手教職員からの提言等をミドルリーダーがどう吸い上げるべきか等理解できました。
- (8) ミドル・アップダウン・マネジメントが機能する組織作りとして、風通しの良い職場・縦の連携・横の連携の提言はとても重要であり、参考になります。
- (9) どこの職場でも努力、苦勞されている共通の課題であると思います。組織を立ち上げて、各主任やミドルリーダーに責任を持たせ、改革立案等を行うことにより、組織の活性化や人材の育成につながり、よりよい教育効果が上げられていると感じました。その中で、検証・改善の短期のPDCAサイクルの実施や連絡調整の難しさが感じられ、おなじようなことで悩んでいる人がたくさんいることに勇気づけられました。
メンバーや年齢構成が変われば、また課題も変わってきます。そのことを考え、探っていくことが組織の改革や活性化に繋がることであると確認できました。
- (10) ミドル・アップダウン・マネジメントが本当の意味で効果的に機能するためには、核となる教頭の役割は大きいと思いました。また、ミドルリーダーが周囲に目を向け、横の連携を進めていくためには、ミドルリーダーはフリーの立場がよいと思います。
- (11) 風通しの良い職場作り、ミドル・アップダウン・マネジメントに努力する姿に感銘を受けました。校長に進言する勇気をいただいた気がします。

第4B(小)分科会 組織・運営に関する課題

提案主題 組織的な課題解決のありかたと家庭・地域との連携に係る教頭の役割

サブテーマ 一子どもたちが生き生きと生活する学校をめざしてー

協議の柱 教育課題の組織的な解決並びに家庭・地域との連携・協働における教頭の果たすべき役割

提言者 大分市立舞鶴小学校 教頭 上 野 淳

1 感想

- (1) どの規模の学校においてもあり得る、学校に不適應している子どもと、協働しづらい家庭に対して、どのような姿勢でどのように対応すべきか考えさせられます。
- (2) 校内の重点課題の解決のために限られた人材・環境を生かして取り組んでいることに感心しました。管理職としてその時その場でできる最善を尽くしていると感じました。
- (3) コロナ禍の影響から「遅刻・登校渋り」の児童の改善を図るための連携・協働する学校の姿を目指し、取り組んだ教頭の具体的な実践を見ることができました。
- (4) 学校の教育課程を的確に把握し、課程・地域・教職員のコーディネーター役として広い視野を持ち、率先して指導・支援していくことで、課題が改善して行くことを具体的な実践から学ぶことができました。
- (5) 本レポートで毎日の健康「観察カード」に生活習慣の改善を促す項目を入れるとありました。家庭と連携をとりながら生活習慣の改善を図り、学校生活に適應させるための有効な手段だと思いました。SSW、SC等の関係者とともに、家庭に対してどのようにアプローチしていくか、改めて考える機会になりました。
- (6) コロナ禍の中で昨年度不登校児童が増加し、また、学校の方針を保護者と共通理解していただく場ももてない見切り発車の教育活動の様子、その中で、教頭を中心に全職員で取り組んでいた実践に感銘を受けました。しかし、「教頭が率先垂範で動いている」のは理解できましたが、一方で本来の「組織・運営」としては課題もあると感じました。
- (7) 最重要課題の「いじめ・不登校の防止」「遅刻・登校渋りの児童の改善」を図ることで子供たち一人ひとりが生き生きと過ごせるようになるため、組織としての取組がよくわかりました。教頭として学校全体の組織的な運営、若手教職員に対しての支援の様子、保護者への丁寧な対応と保護者からの信頼など、教頭が教育活動に深く携わっている姿に頭が下がります。
- (8) 学校課題を解決するための組織作りや人材育成に焦点を当て、運営面の教頭の役割が明確にされています。①全職員での相談体制作り ②ミドルリーダーを核にした分掌体制 ③学校評価をもとにした地域・保護者への学校改善の発信と連携 いずれも教頭が具体的な助言を行い、組織や個をつないでいます。教職員は見通しをもって教育活動を行い、成果も現れてきています。
- (9) 校長の掲げる最重要課題を教頭が中心となって全教職員に方向性を示すことにより意識が高まったところを参考にしていきます。

第4B（中）分科会 組織・運営に関する課題

提案主題 育成指標に基づいた計画的・組織的な若手教職員の人材育成

協議の柱 教頭として、育成指標にもとづいた若手教職員の人材育成をどのようにすすめるか

提言者 臼杵市立西中学校 教頭 戸 高 浩 二

1 感 想

- (1) 若手教職員の人材育成に関して具体的な方策が提言されました。組織的にどう取り組んでいくか、小・中の違いを乗り越え、学校規模によってそれぞれ工夫し、導入するのがよいと思われます。
- (2) 人材育成を目的とした組織的な取組として、県の育成指標を基に校内独自の育成指標を作成し、活用したいことが特筆すべき点です。若手教職員にとってのゴールが明確で、つけるべき力を意識しながら取り組むことができると感じました。
- (3) 「若手を育てる」ことはどの学校においても喫緊の課題であることを改めて感じます。様々な教育課題に対応できるように支援・指導できる体制づくりが必要です。
- (4) 若手教職員の人材育成のため、育成すべき資質・能力の育成指標を作成し、ミドルリーダーを中心とした組織的な取組がよくわかりました。
- (5) とてもよい取組ができています。大分県教育委員会の「中学校学力向上対策 3つの提言推進拠点校」への指定が他の学校にどう生かしていけるか、人材確保等を含めて今後に期待します。
- (6) 「3つの提言推進拠点校」に指定されて3人の加配を上手に活用し、人材育成指標を設定し、ミドルリーダー・若手教職員双方が組織的にOJTに取り組んでいる様子が分かり、学ぶところが多い。しかし、恵まれた人事配置が土台になっているのはうらやましかったです。
- (7) 校内での計画的・組織的な教職員の人材育成が行われています。特に、育成指標を基にミドルリーダーを活用する組織と研修計画によるOJTにより若手とミドルリーダー双方の資質・能力を高めることができています。
- (8) 人材育成のため、若手教職員の育成指標を定めて、豊富な加配を活用して組織的にOJTを進めています。具体的な目標を示して、実践や研修を積ませる取組は人材育成の有効な手段だと思います。
- (9) 提言は現在、どの学校においてもあてはまる課題への取組でしょう。独自の育成指標の作成や計画的な取組など課題に向き合い、成果を出しています。
- (10) 教職員の半数の若手教職員を組織的に育成する取組が素晴らしい。若手教職員を育てるためにはミドルリーダーの存在は大きい。研修の計画・運営の中で、ミドルリーダーの資質能力も高めることができた点を参考にします。
- (11) 大分県教育委員会の「大分県公立学校教員育成指標」を基により具体的な学校独自の育成指標を作成しています。更に、組織的・計画的な研修により、若手教職員の課題解決やミドルリーダーの資質・能力の向上にも繋がっています。教頭のリーダーシップのもとに組織を動かし、的確なOJTが実施されています。

第5 A (小) 分科会 教職員の専門性に関する課題

提案主題 「ベクトルをそろえる 強みを生かす 高め合う」をキーワードにした教職員の意識改革
協議の柱 学校の教育目標達成に向けて、OJTをさらに推進していき、「チーム学校」として組織的に取り組み、「芯の通った学校組織」を構築していくために、教頭として求められる姿は何か

提言者 佐伯市立上野小学校 教頭 清水 昌 和

1 感 想

(1) 「ベクトルをそろえる 強みを生かす 高め合う」をキーワードとした教職員の意識改革をしていく取組でした。校長のビジョンに沿って、教職員集団を同じベクトルにそろえ、具現化していくことが教頭の大きな役目であり、率先した取組がされていました。

学校教育目標達成に向けて、校内研修で位置づけた「ミニ研修」はベテラン教職員が培ってきた知識や技能を、若手教職員に伝える場として、一人ひとりの強みを出し合う場として有効だと思いました。

(2) 若手教職員をいかに育てるか、幅広い年齢層の教職員集団のベクトルを同じ方向に向け高め合っていくための取組がよくわかりました。

教頭としてOJTの推進に取り組んでいることがよくわかりました。

(3) 校長が示すビジョンの具現化に向けて、教頭が発信者になってミニ研究をしているところは素晴らしい。ミドルリーダーがより中心的になるともっと進むと思います。

(4) 若手教職員の人材育成のために教頭が幅広い視点から他の分掌主任等と協力して、OJT研修を計画・実践している。頭の下がる思いがします。

(5) 学校教育目標の実現に向け、「チーム学校」として向かうべきベクトルをそろえ、組織的な取組となるよう、教頭が各個人の適性を見極め、生かし、各種主任や担当とうまく連携を図る取組になっていました。

(6) 互いに高め合う教職員集団にするために教頭が学校運営の要となり、主要主任と連携しながら取り組むことでミドルリーダーも育っていると感じました。教頭の大きな役割の一つは人材育成です。同じベクトルで進むために日頃からミドルリーダーとコミュニケーションをとり、信頼関係が築けていると思いました。

(7) 一人ひとりの強みを生かすためにミニ研修でベテラン教職員の知恵・技能を若手教職員に伝える場を持つ取組は、是非やってみたいと思いました。ICT研修では機器の扱いに慣れている若手教職員が中心となってベテランに知識・技能を教える場を持つことで、若手の強みも生かせると思いました。

(8) 「ベクトルをそろえる 強みを生かす 高め合う」をキーワードにしてコロナ禍における教職員の意識改革を分掌主任と繋がることによって組織的に高めていった取組でした。また、教職員だけでなく、保護者や地域に働きかけて行った点は新学習指導要領のキーワード「社会に開かれた教育課程」の実践として注目される。この取組を持続可能な取組にするためには短期のPDCAサイクルを回して行き、その検証をどの場面で行うかを明確にしていくことが必要でしょう。

第5 A (中) 分科会 教職員の専門性に関する課題

提案主題 教職員が自らのキャリアを意識し、それぞれの立場で専門性の向上を図る教頭の役割
協議の柱 教頭として、所属職員に「大分県公立学校教員育成指標」の枠組みを意識させながら「教職としての素養」「教職の実践」について、どう「人材育成」の視点を持ち続けていけばよいか

提言者 佐伯市立直川中学校 教頭 富 高 長 寛

1 感 想

- (1) 小中一貫校の教頭として職員各自のキャリアステージを意識させながら、モチベーションをいかに高く持たせて学校運営を行っているか、よくわかりました。年度初めの面談でキャリアステージを意識させることはとても大事だと思います。
職員通信を読ませていただきました。参考にしたいと思いました。
- (2) 自分の悩みと重なるところがあり、教職員の専門性を高めるために教頭としての意識や取組内容がとても参考になりました。特に、若い教職員等の参画意識、モチベーションの高揚の取組は今後生かされると思います。
- (3) 自分の弱点や苦悩を文章で語りかける内容で職員室通信を週1回のペースで出しておられる。なかなかできることではないが、職員のベクトルをそろえる、或いは職員の人間関係づくりのためにもとてもすばらしい実践だと思いました。
- (4) 教職員の専門性を高めるため、様々な取組が行われています。教職員との信頼関係の構築の必要性を強く感じました。
- (5) 人材育成の視点を持ちながら教頭自身の苦悩や弱さを文章で語りかける職員室通信を発行したり、やる気が出るような声かけをしたりして、受け身感からモチベーションを高めるような環境を作ることに努力しています。
- (6) 小中一貫校で小・中学校の教職員をまとめるのはすごく大変なことだと思います。その中で、キャリアステージを意識させた自覚、学校運営参画意識を高める取組に絞って改革をしていることに学ぶところがあります。若手教職員の人材育成やミドルリーダーの育成等とても参考になりました。今後も人材育成の視点を大切にしながら日々の取組を丁寧に紡いでいってください。
- (7) 職員室通信を定期的に発行し、教職員の意識を高めていく取組を見習いたいと思います。業務改善に参画させるためには全職員での協議から小グループの協議へという流れを確立していくことは、教職員の意識を高めるためにも素晴らしい取組です。
- (8) 校長の考えを可視化するという教頭の立ち位置を意識した取組をしています。特に、職員室通信は控えめながらもしっかりと職員にメッセージを送るものです。継続して取り組まれておられることが素晴らしい、貴重な提案でした。
- (9) 職員室通信を通じて、喫緊の課題である若手教職員の育成、ベテラン教職員の意識改革、働き方改革の促進などに効果的に働きかけたことは参考になります。また多忙な中、毎月3～4枚の発行という行動力の高さに感銘を受けました。

第5B（小）分科会 教職員の専門性に関する課題

提案主題 学校内外の人的資源を活用しながら「学校教育目標の実現」と「働き方改革」を進める教頭の役割

協議の柱 教頭として、地域と連携しながら「学校教育目標の実現」と「働き方改革」をどう進めるか

提言者 日出町立豊岡小学校 教頭 河村 雅文

1 感想

- (1) S Aの活用は教職員の負担軽減につながり地域との連携に繋がります。担当者の負担は多くなるが、学校全体の業務改善は図られると思います。本校でも検討しています。学校運営協議会で教職員・学校がすべき業務、地域が担う業務、保護者が担うものがきちんと分担できる取組だと感じました。
- (2) 子どもと向き合う時間を確保するために、教頭が率先してアイディアを出しながら働き方改革を進めていることがよくわかりました。S Aの人材確保の難しさに苦労されていることも伝わりました。
- (3) S A（スクールアシスタント）制度で例年 1,000 人ほどが学校参画をしているということに驚きました。学校側から積極的に門戸を開き、地域や保護者の学校参画を得ていることは素晴らしいです。しかも子供の学習支援だけでなく、教職員の業務も担ってくれていることが働き方改革ですね。一日のタイムスケジュールの中で担任・S Aが何をして、どのような役割をするのかこれからもっと大切になってきます。
- (4) 働き方改革は行事の精選と意識の差をなくすとの両輪でいくというのは納得できます。行事の見直しは子供に効果があるかどうかという視点で見直すとよいことがはっきりしました。専門性を育むゆとりを持つためにS A活用は効果的であると理解できました。
- (5) スクールアシスタント（S A）制度は学校がすべきもの、地域がすべきものに分けられていてわかりやすい。校内業務の見直し・効率化とともにS A制度の積極的な活用が必要だと思いました。
- (6) 学校内外の人的資源を活用しながら「学校教育目標の実現」を目指すことについては、学校運営協議会を核にしたコミュニティスクールにおいて、とても重要なことだと思います。年度当初に人材登録をしてもらい、授業や行事面でサポートをしてほしい時にS Aコーディネーターを通じて地域人材を派遣してもらうことは、理想的な形だと思いました。この制度には地域人材と保護者人材の登録があることに魅力を感じました。地域の方であれば学校内外での子供たちのサポートが期待でき、保護者であれば学校と家庭で子供の課題と指導方法、目標などの共有ができて画期的です。S A制度がスムーズに進んでいくと、働き方改革にも繋がっていきます。
- (7) 勤務実態から課題を明確にして、教職員の意識改革、学校の課題への組織的対応、S A制度の活用へ繋がったことは効果的でした。S A制度が上手く機能しています。学校側の窓口がはっきりしていることは重要です。教職員とS Aをつなぎ、連携がスムーズに行えたことで、働き方改革にも繋がっています。

第5B分科会 教職員の専門性に関する課題

提案主題 「働き方改革」推進と教職員の資質向上を図るための教頭の役割
サブテーマ 一教職員の専門性を活かした協働体制の構築と校内衛生委員会の連携を通して一
協議の柱 教頭として、業務改善を図りながら、つながりを強化し、教職員の資質向上をどの
ように図っていくか

提言者 国東市立安岐小学校 教頭 徳 丸 将

1 感 想

- (1) 教職員の意見を聞き、若手・ベテラン双方向の学び合い・支え合いをどのように創っていくか改めて考えさせられます。そのための教頭に役割は大きいと思います。
- (2) 人材育成と働き方改革はどこの職場でも大きな課題だと思います。教頭がリーダーシップをとりながら業務仕分けをして、働き方改革につなげる取組は大変参考になりました。
- (3) 校内の働き方改革に着手し、リードしていった教頭の取組がよくわかりました。「業務仕分け」に至る5月の学習会からの流れが勉強になりました。
- (4) 教職員の専門性を高めるために、ベテランが若手にノウハウを伝える工夫、また周知するために教頭が通信を出して情報共有を図っているのは参考になります。
やらされ感をなくすために職員による業務仕分けも当事者意識を育てるにはよい取組と思いました。若手同様に年代に応じたケア・フォローは必要だと思いました。
- (5) 教職員の専門性を活かした協働体制を確立するためには、現状の働き方を検証し、改善して時間的な余裕やゆとりを作り出すことが不可欠だということがわかりました。また、それと並行してミドルリーダーが教職員同士をつなぎ、互いに専門性と資質の向上を図るべきだと思います。
- (6) 教頭のリーダーシップと衛生委員会との連携により、管理職だけでなく、全教職員で業務改善に対する姿勢や意識改革がなされていて、実際、超勤時間も削減されています。業務仕分けは参考になる取組です。
- (7) 若手教職員の育成において、協働体制の構築と業務の効率化及び業務改善に向けての「働き方改革」推進がキーポイントになります。そのために、業務仕分けを検討実行したことで「子供と向き合う時間」を確保できたこと、教科担任制導入と学年部会の充実を図ったことで学年部を中心とした協働体制の構築がなされたことなどはとても素晴らしいと思いました。そして教頭の「職員室だより」によって、若手教職員の育成とベテラン教職員のモチベーションの持続に繋げることができ、更に若年層とベテラン教職員が互いに学び合う双方向の繋がりが生まれてきたことは大きな成果です。
- (8) 業務の仕分けを細分化し整理することで、削減が見える化することができたり、教職員の意識改革ができたりしてすばらしい。
- (9) 業務の仕分けや職員室だよりの発行などは今後の実効性のある働き方改革の推進のために大いに役立ちます。また、校内安全衛生委員会の定期的な開催は職場の課題を浮き彫りにするために必要不可欠だと感じました。

あ と が き

小学校において2010年度、中学校においては2011年度から改訂された学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質能力」「カリキュラム・マネジメント」「『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善」を柱に子供たちの「生きる力」を育むことが求められてきました。

そして、「働き方改革」「若手教職員育成に係るOJT」「GIGAスクール構想実現の取組」「一昨年度末からのコロナ禍」など学校現場において、大きな変革・制約を求められる中での教育活動が始まりました。

このような中、私たち教頭には「生きる力を個々の児童・生徒に育てるためにどのような手立てを取るのか」「教頭としての職務の理解や指導性の発揮」が問われてきました。

第54回大分県公立学校教頭会研究大会「中津大会」では、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から従来の参集型の研究大会の開催はできませんでした。

しかし、全公教第12期全国統一研究主題である「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」を受け、本県の教育課題との関わりの中で、変革期の教育の在り方や教頭の力量向上の方策の究明に向け、それぞれの取組レポートを読み合うことで交流を行いました。レポートに対する感想の中には、「コロナ禍においてOJTの充実の取組がわかった」「校長が示すビジョンの具現化に向けて教頭が発信者となっている取組が参考になった」「教職員集団を同じベクトルに向け高め合う取組が素晴らしい」といった声が多く聞かれました。

また、中津市生涯学習大学講師、安倍恭一先生を講師に、「百の花を咲かす！～我が郷土の歴史人、綺羅星の如し～」を演題にご講演戴きました。その中で、「子どもたちの未来について」「福沢諭吉の母の教え」など今後の私たちの実践に参考となる多くのご示唆を戴きました。

今年度の教頭会での取組を今後の実践に活かし、それぞれの資質向上に努めていくことが何より大切だと考えます。

最後に、コロナ禍における本研究大会開催にあたり、多大なご指導・ご後援をいただきました大分県教育委員会、大分県小学校長会、大分県中学校長会に厚くお礼を申し上げるとともに、大会実施に向けてご尽力いただいた中津市教頭会の皆様に深く感謝いたします。誠にありがとうございました。

令和3年8月

大分県公立学校教頭会

研究部長 廣 田 貞 治

表紙は中津を代表する名勝で、頼山陽が描いた水墨画の代表作「耶馬溪図巻」によって紹介された競秀峰です。